

第3章

宇都宮市が目指す環境都市

第1節 計画の基本理念

第2節 宇都宮市が目指す環境都市の姿

第1節 計画の基本理念

① 基本理念

みんなで築き 未来へつなげよう
環境都市 うつのみや

基本理念のうち「みんなで築き未来へつなげよう」とは、「持続可能な社会」を目指すことと同じ趣旨であり、また、「環境都市 うつのみや」とは次の目標を達成した、環境にやさしいまちのことを意味しています。（宇都宮市環境基本条例による。）

- ① 社会経済活動その他の活動による環境への負荷を低減する。
- ② 限りある資源を循環できる社会を構築する。
- ③ 自然環境を保全する。（生物の多様性の確保を含む。）
- ④ 人と自然とが共生する都市を形成する。

本市は、平成13年10月に環境基本条例を施行し、その基本理念に「環境都市」の実現を定め、平成15年2月の最初の環境基本計画策定時から、21世紀半ばを展望した計画の基本理念（望ましい環境像）として「みんなで築き 未来へつなげよう 環境都市 うつのみや」を掲げてきました。

市民、事業者、行政の各主体の参加と連携・協力によって、持続可能な社会を実現し、より良好な状態で将来世代に渡していくことが、この基本理念（望ましい環境像）の総意であることから、本計画においても継承します。

2 成果指標

基本理念の実現に向けて、環境基本計画の着実な実行を確保するため、施策等による効果を点検する成果指標を設定します。

成果指標は、本市の環境的状态を表すものとして環境分野を代表する指標を用いることとします。

また、成果指標は、基本理念の達成に向けて設定した将来の目標に対して、各評価年度に到達しておくべき目安への達成率により評価します。

なお、これらの指標は、本計画の目指す方向性を的確に反映するなど、環境や社会・経済の状況に即したものとなるよう、継続性等にも配慮しながら項目・目標値の見直しを行うこととします。

【成果指標一覧】

分類	現状	目標
市民1人当たりの二酸化炭素排出量	3.2t-CO ₂ /年 (H25)	2.8t-CO ₂ /年 (H32)
市民1人1日当たりのごみ排出量	552グラム (H26)	530グラム (H32)
自然環境の豊かさに関する愛着度	31.6% (H26)	35.0% (H32)

第2節

宇都宮市が目指す環境都市の姿

① 宇都宮市が目指す環境都市の姿

本計画では、市民、事業者、市（行政）の三者が共通認識を持って良好な環境の創造と保全に取り組むため、本市が目指す「環境都市」の姿を明確にしました。

環境都市を描くにあたっては、持続可能な都市として発展していくために必要な、市民・事業者の主体的な行動・参画の視点として「ひと」、まちづくりの基盤となる都市空間の視点として「まち」、社会・経済との分野横断的な視点として「しくみ」の3つの視点でつなぎ、様々な環境課題が解決された本市が目指す“環境にやさしいまち”の姿としてまとめました。

本市が目指す21世紀半ばの環境都市の姿

みんなが「もったいない」のこころを持って行動し、
自然の恵みとエコで便利なライフスタイルを満喫できるコンパクトシティ

【ひと】市民の暮らしの視点では

みんなが“もったいない”のこころを持って、自然の恵みとエコで便利なライフスタイルを満喫しながら、健康で快適に暮らせるまち

【まち】まちの空間の視点では

水と緑があふれる空間の中に、様々な機能をもった拠点^①が形成され、誰もが目的にあわせて自由に活動、移動できる利便性の高いコンパクトなまち

【しくみ】暮らしや空間を支える仕組みの視点では

みんなが“もったいない”のこころで自然・文化・人・モノを大切にし上手に活用する、環境にやさしい循環の仕組みが、エコな暮らしや経済活動を支えているまち

② 環境都市の実現に向けたシナリオ

環境都市の姿の実現に向けて効果的に取り組んでいくことができるよう、本計画の計画期間内において実現を目指す短期的な姿と、計画期間を超えた将来の理想的なイメージを示す長期的な姿を示します。

このイメージは、2章で整理した環境都市を実現に向けた課題への対策がどのような段階を経て実現していくのかを時間軸で整理します。

短期的なイメージは、本計画期間（前期5年間）内に目指すものとし、次章において示す「重点戦略」が着実に推進されることで導き出されるものとして2020年度頃のまちの姿を目標像として示します。

一方、理想的なイメージを示す長期的なものは、2章で整理した課題への対策が講じられ、本計画の「基本理念」において示されている理想的かつ完成された状態として、2050年頃のまちの姿をイメージとして示します。

③ 環境都市の姿

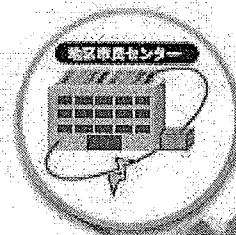
2020年頃のイメージ

現在、市内のいくつかの地域で、市民・事業者単位での低炭素・資源循環や自然共生に係る先導的な取組が広がりを見せ始めています。

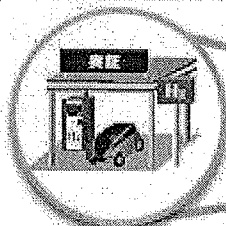
このイメージ図は、本計画中間年（2020年）までに、重点戦略等を実施することによる、まちの変化をイメージ図として示しました。

木材や地下の冷熱エネルギーなど地域の環境資源を活用した産業やコミュニティ活動が活性化しています。

防災拠点(地区センター等)によるエネルギーの自立化

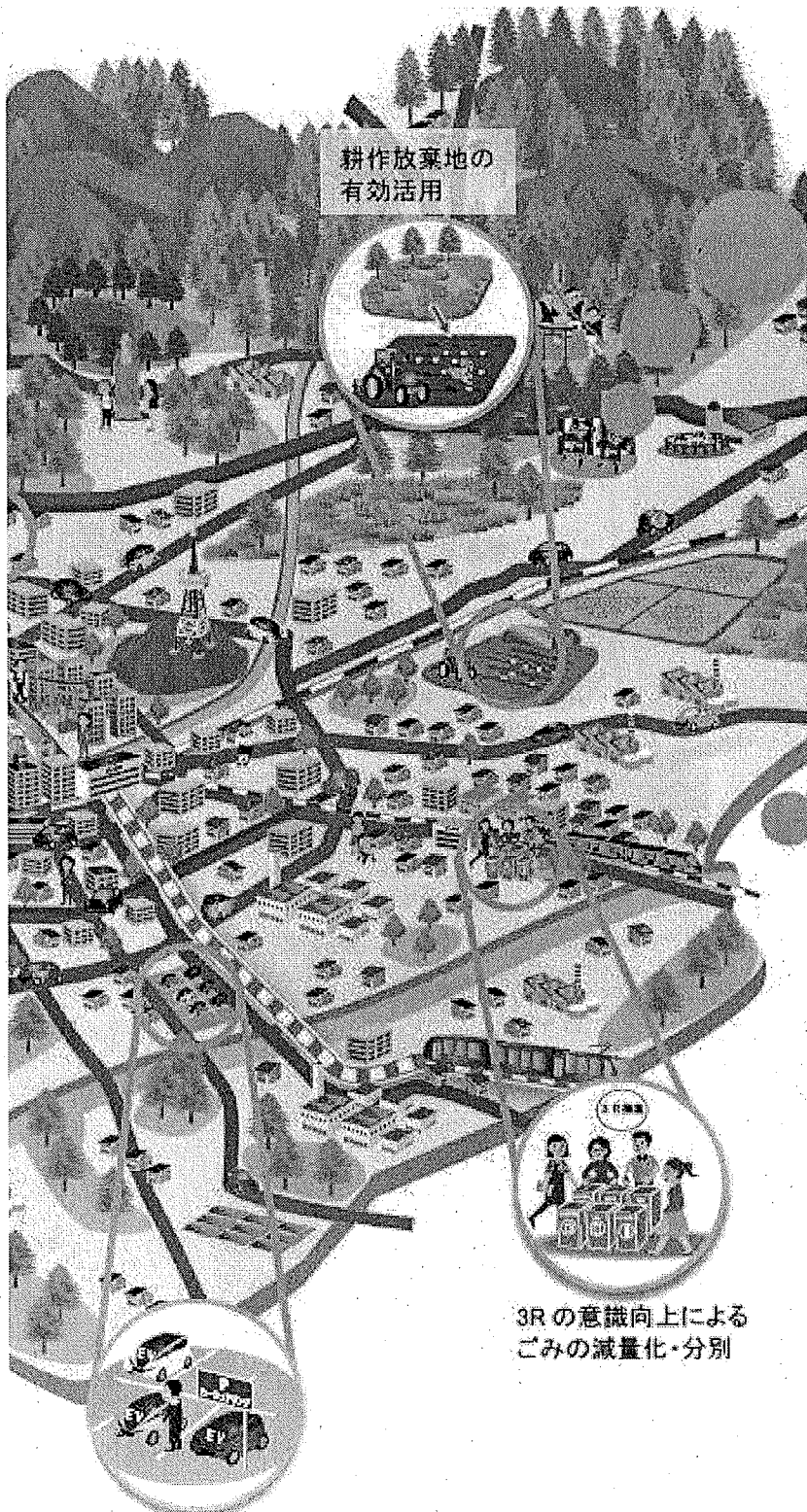


水素等の最新技術の実証

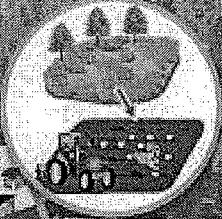


太陽光発電や蓄電池などを導入したエネルギーを自給自足する災害にも強い住宅が普及し始めています。

※Home Energy Management System (家庭用のエネルギー管理システム) の略です。電気やガスなどのエネルギー使用状況を適切に把握・管理し、削減につなげシステムです。

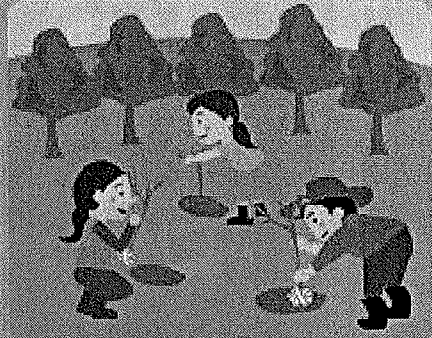


耕作放棄地の有効活用

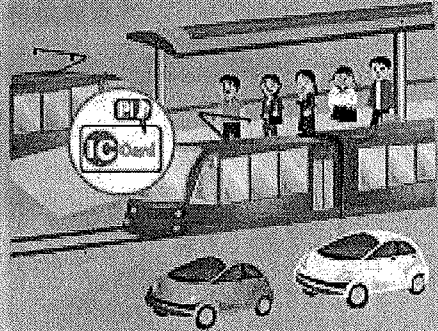


3Rの意識向上による
ごみの減量化・分別

カーシェアリング



身近な自然を守る意識が高まり、
緑化や自然環境の保全活動が普
及しています。

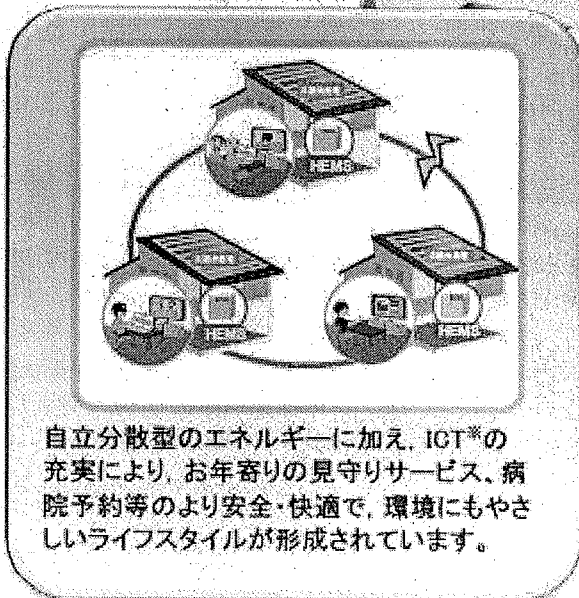
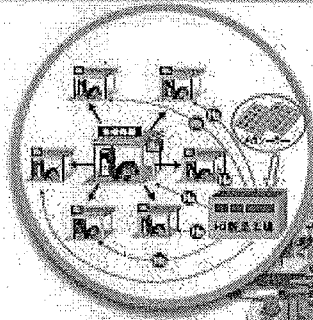
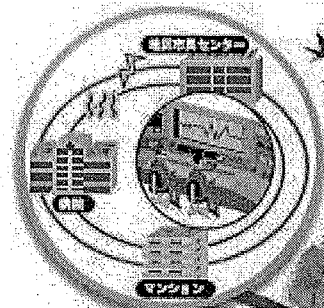


LRT等の導入により公共交通の利
便性が向上し、誰もが安心して移動
できる環境が整い始めています。

2050年頃のイメージ

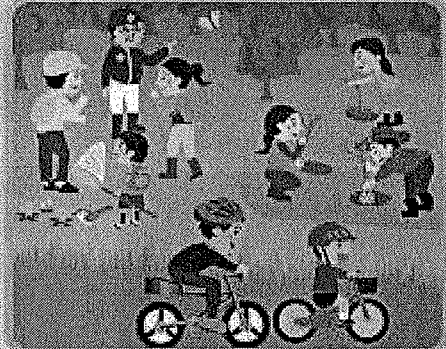
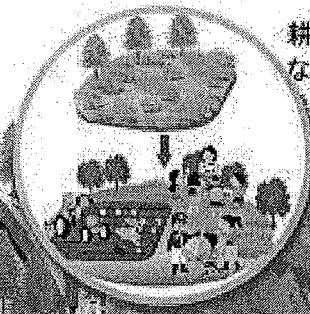
2050年頃には、コンパクトシティの形成（拠点の形成・集約，ネットワーク化）による市街地と自然がメリハリのついた市域の中で，各地域内でのエネルギーの自立・分散や資源循環などが進み，まち全体が活性化しています。

このイメージ図は，本市が目指すネットワーク型コンパクトシティが形成される中で，環境都市実現に向けての課題等が順調に解決された“環境都市の姿”を予測し，イメージ図として示したものです。



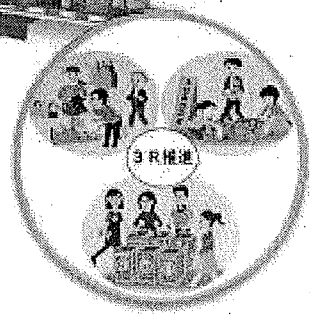
*Information and Communications Technology の略です。コンピュータやデータ通信に関する技術のことです。

耕作放棄地のさらなる有効活用

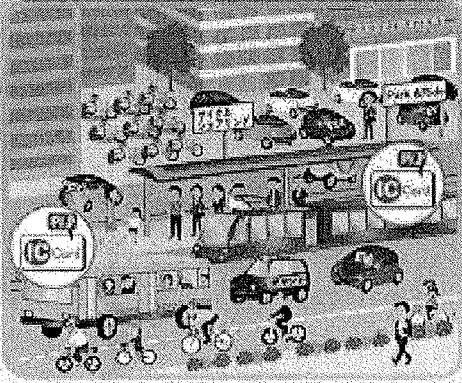


身近にある森や田畑を訪れる機会が増え、自然に関心を持ち、楽しみながら自然と共生した暮らしが広がっています。

3R推進



3Rの意識定着によるさまざまな活動

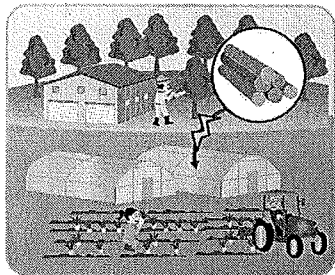


移動方法選択のさらなる充実化による、子どもからお年寄りまで、誰もが快適に、安心して移動できるようになるなど、市民の活動が活発化しています。

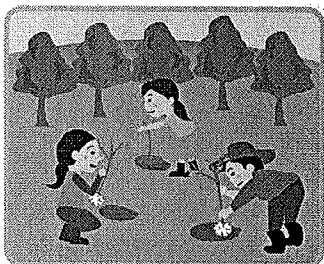
カーシェアリング
サイクルシェアリング

◆ (2020年頃)のイメージ像における吹き出し絵について

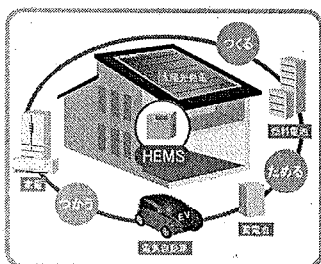
○大きな吹き出し絵(四角形)



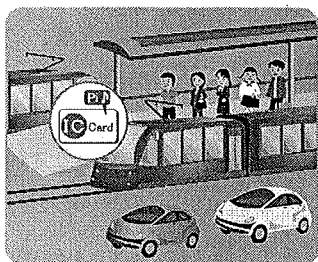
周辺の森林から発生する間伐材や各家庭から排出される剪定枝などを電気や熱エネルギーとして利用するなど、地域特性を活かした資源循環による新たな産業の形が出始めることをイメージしています。



自分たちの身近な自然を守る意識が高まることで、植樹などの森林等を保全する取組に参画する市民の数が増加し始めていることをイメージしています。

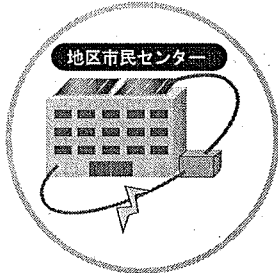


太陽光発電だけでなく蓄電池や電気自動車、HEMS(ホームエネルギーマネジメント)などが導入されることで、家の中でエネルギーをつくり、たくわえ、賢くつかうことができるようになるなど、無理をせず環境やさしい生活を送ることが可能となっていることをイメージしています。

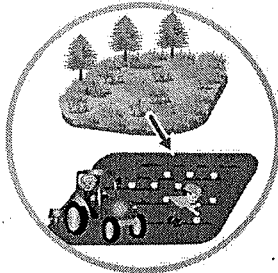


LRTが導入されることで、自動車から公共交通等に利用転換が図られることで、大気汚染物質や温室効果ガスの排出が低減されるとともに、誰もが移動しやすい交通ネットワークが構築されていることをイメージしています。

○小さな吹き出し絵（円形）



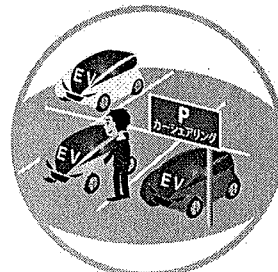
地区市民センターなどの市有施設に、太陽光発電と蓄電池を導入することで、環境負荷の少ない効率的なエネルギー利用と災害時におけるエネルギー確保を図ることをイメージしています。



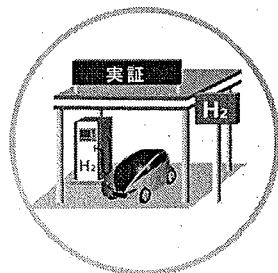
耕作放棄地となっている土地が元の田畑として適切に利用されることで、農地の多面的機能が回復している様子をイメージしています。



市のスローガンである「もったいない」の精神の意識醸成により、市民の3Rに関する取組が活性化され、分別率が向上していくことをイメージしています。

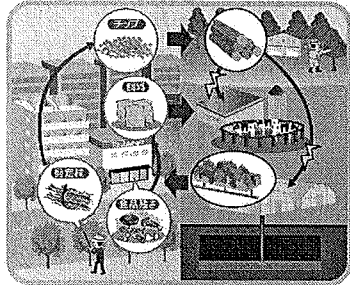


産業拠点などにおいて、公共交通と連携したカーシェアリングの取組が行われ始めたことで、公共交通機関の階層性が高まり、快適に市内各所へ移動できるようになり始めていることをイメージしています。

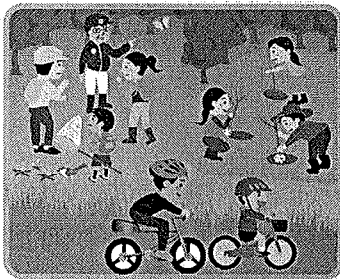


水素ステーションの設置など、次世代の環境技術の利活用に向けた取組についても、市内で積極的に展開していることをイメージしています。

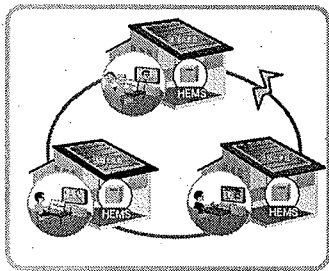
◆ (2050年頃)のイメージ像における吹き出し絵について
○大きな吹き出し絵(四角形)



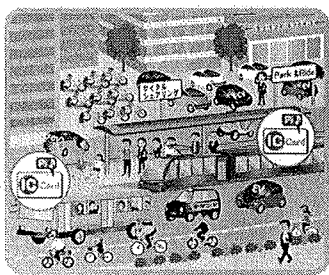
農山村部で周辺の森林から発生する間伐材を集め、燃焼することで電気や熱をつくったり、地下水からの熱を利用して付近のビニールハウスなどで農作物をつくり、都市部に出荷します。一方、都市部では食品の残さを回収し、堆肥化して農山村部に送るなどの地域の特性を活かして相互に補い合う循環が行われていることをイメージしています。



自分たちの身近な自然を守る意識がさらに高まることで、森林の植樹だけでなく、自然環境を活かした環境教育や体験、サイクリングなどへと活動の幅が広がり、市内外を含むさまざまな方々の交流が促進されていることをイメージしています。

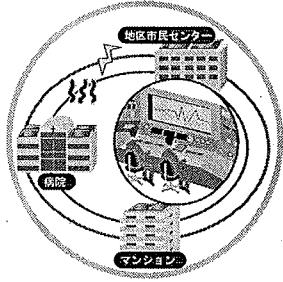


家の中でエネルギーをつくり、たくわえ、賢くつかうだけではなく、面的なエネルギー融通やICT技術の充実により、「高齢者の見守り」や「病院の予約」、「デマンドレスポンス」などのエコで便利な新たなサービスが展開されていることをイメージしています。

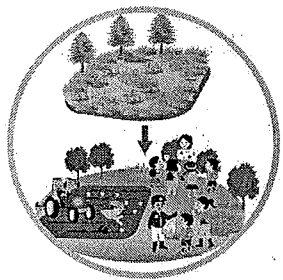


LRTをはじめとして、バスやデマンドタクシー、パーク&ライドやサイクルシェアリングなどの移動選択が充実することで、さらなる移動の利便性向上と環境配慮を両立した階層的な交通ネットワークが構築され、人々の往来が活発化し、街全体が活性化していることをイメージしています。

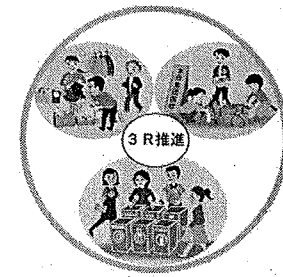
○小さな吹き出し絵（円形）



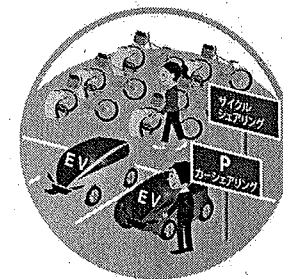
単独の施設だけでなく、複数の施設において再生可能エネルギーなどが導入され、エネルギーマネジメントシステムで統合管理することで、効率的なエネルギーの利用が図られ、さらなる地球温暖化抑制への貢献、防災機能の強化がなされることをイメージしています。



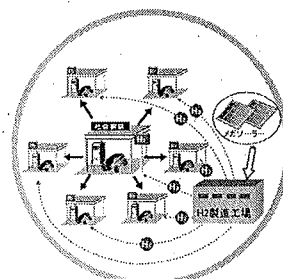
耕作放棄地となっているような土地を元の田畑として利用するだけでなく、環境教育のフィールドなどにも積極的に利用されていることをイメージしています。



市民の3Rの意識が定着し、分別だけでなく、地域においてフリーマーケットや集団回収などのさまざまな3Rの活動が広く展開されることをイメージしています。



カーシェアリングだけでなく、サイクルシェアリングなどへと取組の幅が広がることで、環境にやさしい移動手段の選択肢が増えたことで移動の環境負荷低減がより一層推進されていることをイメージしています。



燃料電池自動車などの普及に伴い水素ステーションも市内各所に設置されるとともに、再生可能エネルギーから水素を製造する、新たな環境関連の産業が創出されていることをイメージしています。

公益財団法人グリーントラストうつのみやの活動

1) どんな団体？

昭和50年代以降、急速に進む都市化の中で、雑木林など身近な緑の環境が失われてきました。昭和59年と平成元年の市街化地域における樹木調査の結果を見ても、5年間で15%、面積で88haが減少しました。

こうした身近な緑の減少に危機感を持つ市民が中心となって、平成2年7月に緑の環境を守り、つくり、育てるグリーントラスト運動を推進する市民組織「グリーントラストうつのみや市民会議」が設立されました。

任意組織「市民会議」における活動を通して、緑の環境を市民自らの手で守ろうという気運が高まり、さらに多くの市民の参加を得た広範な市民運動として永続的かつ安定的にグリーントラスト運動を進めるため、「市民会議」を母体として、平成3年3月28日に「財団法人グリーントラストうつのみや」が誕生し、平成25年4月1日に「公益財団法人グリーントラストうつのみや」に移行しました。

2) どんな活動をしているの？

グリーントラストうつのみやが活動の拠点としている保全緑地には、長岡樹林地や鶴田沼緑地、戸祭山緑地、海道小北樹林地、伝馬町の本陣跡イチョウがあります。主な活動として、下草刈りや落ち葉さらいといった樹林地の保全、昆虫観察会や野菜の収穫体験といった自然学習や体験活動支援、写真コンテストや絵画コンクール、トウキョウサンショウウオなどの動植物のモニタリング調査を実施しています。



活動の様子（左：落ち葉さらい、右：昆虫観察会）

出典) 公益財団法人グリーントラストうつのみや HP